

れき じん

となん歴史民だより vol.41

Morioka tonan history and folklore museum

平成 26 年 12 月 16 日 発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel/Fax 019-638-7228



平成 26 年度 史跡・文化財巡り 聖福寺（八幡平市）にて

是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

○秋の事業報告

- ・都南の歴史ロマン旅
- ・都南歴史民俗資料館
移動資料展

- ・史跡・文化財巡り

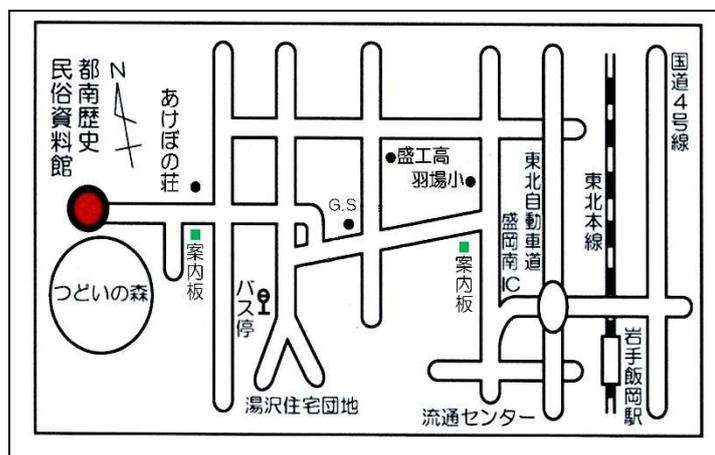
○資料は語る④

○盛岡市所在

- 指定・登録文化財紹介④

○となんの昔ばなし④

MAP☆ACCESS



○利用案内

開館時間

午前 9 時から
午後 4 時まで

入館料

無 料

休館日

月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)、年末年始

秋の事業報告

今回は、平成26年9月から11月において公民館と連携して行った事業、また「となん・かけはしの会」の事業である史跡・文化財巡りなど当館の活動について報告します。

●都南の歴史ロマン旅●

平成26年度の盛岡市都南公民館事業として、9月28日(日)に都南地域の史跡をバスで巡る「都南の歴史ロマン旅」があり、藤澤栄耕氏、上和野基氏、当館学芸調査員が案内を務めました。当日は午前と午後の部に分かれ、前林雀神社や夏屋敷のキャラボク、



【写真】 大国神社現地説明の様子

大国神社、大萱生金山跡などを訪れました。都南地域に残る寺社や貴重な天然記念物を見た参加者からは、都南地域にはこんな場所があったのかと驚きの声があがっていました。ロマン旅では、瀧源寺のシダレカツラ(国指定天然記念物)や大国神社献額15面(市指定有形文化財)などの文化財を見せていただき、都南地域の歴史を目で見て知る貴重な機会となりました。

●都南歴史民俗資料館移動資料展●

平成26年10月18日(土)～26日(日)の期間「都南歴史民俗資料館移動資料展」が、盛岡市都南公民館(キャラホール)で開催されました。この期間は、ちょうど同公民館の「都南公民館まつり」の開催時期でもあり、館内の一室を借り「都南で働く」「都南で食べる」「都南で暮らす」という3つのテーマごとに資料を展示しました。本展では、当館が所蔵する明治から昭和40年代頃にかけての旧都南村湯沢(現盛岡市湯沢)における農作業や年中行事の様子を昭和50年頃に再現・記録した際の写真を合わせて紹介し、来場者からは懐かしいという声を多くいただきました。



【写真】

左：「都南で働く」展示風景

右：当館所蔵写真

縄張り植え

また、開催初日には農具を使用した脱穀・選別・粃摺り体験と、農作業の合間に食べた“こびる”として“かまやき”作りのイベントがありました。当日は、地元農家の方々から千歯扱きや足踏み脱穀機、唐箕などの使用方法を教えていただき、参加者は子どもから大人まで体験を楽しんでいました。現在のように効率的な機械とは違いますが、それぞれの農具には当時の人々の知恵が詰まっていることを、体験を通して知ってもらうことができました。

農具体験後の“かまやき”作りでは、出来上がったおいしい“かまやき”を食べた参加者から、家でも作りたいという感想をいただきました。今回のように昔の農作業の大変さと、“こびる”という楽しさを体験したことが、お米の大切さを再確認し様々な農具への関心を持つきっかけになればと思います。



**【写真】 千歯扱きによる
脱穀体験**

●史跡・文化財巡り ～鹿角街道～●

例年実施されている、となん・かけはしの会主催の史跡・文化財巡りが11月11日(火)に実施されました。今回は、盛岡市文化財保護審議委員の吉田義昭氏が案内役となり鹿角街道をバスで巡りました。街道は秋田県まで続きますが、距離の関係もあり盛岡から八幡平市の西根寺田地区までを巡りながら途中、安倍館遺跡、追分けの碑、八幡平市西根歴史民俗資料館、聖福寺、白坂観音堂跡、留之沢一里塚を見学しました。



【写真】 白坂観音堂跡にて

鹿角街道は、盛岡城下から秋田街道と分岐し花輪方面へと続く脇街道として整備されました。当日は、吉田氏に江戸時代の城下や街道、今に残る史跡について詳しく説明していただきました。また、街道の難所付近に残る留之沢一里塚を訪れた参加者は、街道をゆく当時の人々の様子を思い浮かべ、その苦勞を感じ取っていました。

参加者から好評をいただいた今年度の史跡・文化財巡りを参考に、次年度も参加者が歴史や文化へ理解を深める機会となるよう有意義な内容にしたいと考えています。

次回企画展の案内

【第5回 旧暦ひなまつり展 ～鎌田コレクションを中心に～】

平成27年3月14日(土)～4月12日(日)



【馬鍬(まんが)】

馬鍬とは、田植えの準備として水を張った田んぼの土を細かくするため牛馬に引かせる農具です。農業機械が登場する以前、肥料の運搬や田打ちなど農作業において馬は貴重な労働力でした。

馬鍬は、使用する際には馬を導く人(させとり)と馬鍬を押す人(馬鍬押し)の2人が必要で、当時は子どもたちも手伝いながら作業をしていました。昭和20年代以降、耕耘機やトラクターなどが登場したことで馬鍬も役割を終えますが、今でも展示している馬鍬を見た来館者から懐かしいという声を聞きます。

参考：下湯沢高齢者学級・同老人クラブ、生活記録編集委員会編「生活記録集 昔の農家とくらし」(1988)、都南村誌編集委員会「都南村誌」(1974)

市指定無形民俗文化財



法領田獅子踊り

乙部地区に伝わる獅子踊りで、踊り手が身にまとった幕を振りながら踊る幕踊り系獅子踊りです。南部光行が甲斐国(山梨県)から奥州に下向する際に旅の安全を願い随行したのが始まりとされています。すべて違う顔をした7頭の獅子のほか、笛吹き、唐団扇振り、太鼓打ちなどによって構成されています。

長く中断されていましたが、昭和40(1965)年に復活し、現在も如法寺(乙部)に奉納されています。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』(2008)、都南村教育委員会『都南の民俗芸能』(1983)

『お墓から生まれた和尚さん・後編』

となんの昔ばなし四十一

老人は、山で生まれたことから赤ん坊に「山助」と名付け山助が七歳になるまで育てました。その後、和尚さんにお願いして山助を引き取ってもらい、和尚さんのもと山助は字の読み書きや読経に励み、いつの間にか十三歳になりました。ある時、和尚さんと老人は山助を呼び、山助の両親のこと、母上(はは)が山助の仏教信仰と親孝行を願っていたことや、墓地から聞こえる泣き声で掘り出し、老人や和尚さん、村人の世話になり育ててきたことなど、今までの生い立ちを詳しく説明しました。山助は涙を流し、「両親、和尚さん、爺、村人の恩も知らず、ただ今まで暮らし、何とも申し訳ありません。今から心を入れ替えて勉強し、皆様の恩に報いるため、また両親の供養をします。」といい、それからは一生懸命に学びました。一を聞いて十を知るとは、山助のことでしょうか。やがて、二十歳になった山助は立派な和尚さんとなり、今までお世話になった寺の和尚さんに別れの挨拶をして、托鉢を受けながら仏の教えを広めました。葛巻や一方井に宝積寺を開き、飯岡に辿り着きました。紫雲のたなびく飯岡山を訪ねたところ、仏像に似た奇石がありました。その昔、坂上田村麻呂や慈覚大師の霊場であることを知り、ここに長善寺を開き仏の教えを広めました。お墓から生まれた和尚さんは、長善寺を開いた山月和尚その人で、大永六(一五二六)年二月に一生を仏の道につかえて亡くなりました。

出典：『となんの民話』(都南歴史民俗資料館、一九八八)